

原 著

高齢者ボランティアとの協働による SOS の出し方に関する教育授業の開発と評価：中学生への3ヶ月持続効果の検討

小川 将^{*1}、鈴木宏幸^{*1}、高橋知也^{*1}、村山 陽^{*1}、
松永博子^{*2}、藤田幸司^{*2}、本橋 豊^{*2}、藤原佳典^{*1}

要旨

子どもの自殺対策の一環である「SOS の出し方に関する教育」は国や都が推奨するもので、中等教育の特別授業として位置づけられている。

府中市は、学校、絵本の読み聞かせ活動をしている高齢者ボランティアと連携し、SOS の出し方に関する教育授業（以下、「特別授業」）を実施した。本研究では特別授業が、中学生が悩みを抱えた際の SOS の出し方に与える影響について検討した。

特別授業は府中市 A 中学校 2 年生を対象に実施された。50 分の授業中に、市職員がストレス、SOS の出し方、相談機関を説明、高齢者ボランティアは授業内容に関連する絵本の読み聞かせを行った。163 名（男子 82 名、女子 81 名）を分析対象とした結果、特別授業の実施 3 ヶ月後では、悩みや相談意欲を持つ生徒の割合の増加、ストレスコーピング得点の向上がみられた。

本研究から、知識や相談意欲などの意識レベルの教育効果、および「シニア読み聞かせボランティア協働型プログラム（1 回完結式）」の実用性が示された。

Keywords : SOS の出し方に関する教育、中学生、高齢者、絵本、府中市

1. 背景

我が国の自殺者数が高い水準にあったことから、平成 18 年に自殺対策基本法が公布・施行された¹⁾。平成 19 年には政府が推進すべき自殺対策として「自殺総合対策大綱」が閣議決定され²⁾、平成 29 年までに 2 回の改正が行われている。自殺総合対策大綱は、誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指し、対処することを目的としている。そのため、自殺対策を、社会的要因も踏まえて総合的に推進することが明記されている。その対策の 1 つとして、相談機関の存在を知らないために十分な社会的支援が受けられないことがないように、関係機関の幅広い連携により相談窓口を周知するための取組を強化することが求められている。また、地域の多様な関係者の連携・協力を確保しつつ、地域の特性に応じた実効性の高い施策を推進していく

ことが重視される。

学校教育においては、学校が推進すべき教育内容として「命の大切さを実感できる教育」、「様々な困難・ストレスの対処方法を身に付けるための教育（以下、「SOS の出し方に関する教育）」、「心の健康の保持に係る教育」がある。特に SOS の出し方に関する教育においては、体験活動、地域の高齢者との世代間交流等を活用することが推進されており、「学校と地域が連携して、児童生徒が SOS を出したときにそれを受け止めることのできる身近な大人を地域に増やすための取組を推進する」ことが求められている。

これらの社会的要請に 대응する先進事例として、「プロトタイプとしての東京都足立区モデル：1 回完結式外部講師活用型」、「社会実装の促進をめざす東京都モデル：1 回完結式ティーム・ティーチング DVD 活用型」、「命の教育プロジェクトとして絵本を活用した授業を行う北海道教育大学教職大学院モデル：1 回完

*1 東京都健康長寿医療センター研究所

*2 自殺総合対策推進センター

結式教師担当絵本活用型」がある⁴⁾。いずれも1回の授業で完結し、多くの時間を確保することが難しい学校の実情を考慮した構成となっている。

しかしながら、SOS の出し方に関する教育の普及、推進を考慮すると、さらに地域に根ざしたプログラムも開発されなければならない。その1つに、地域の高齢者世代と子どもの交流を促進するプログラムである「世代間交流による高齢者の社会貢献に関する研究: Research of productivity by intergenerational sympathy (以下、「REPRINTS®」)」がある。REPRINTS®は米国のスラム地区の高齢者による学校ボランティア介入研究 Experience Corps®をモデルに、東京都健康長寿医療センター研究所が2004年に開発した絵本の読み聞かせボランティアプロジェクトである。プロジェクトを実施した結果、絵本の読み聞かせを通じた高齢者と中学生の交流により、中学生の高齢者に対する態度の変容がみられた³⁾。従って、絵本の読み聞かせが、幼稚園・保育所や小学校のみならず、中学校における交流のきっかけとして活用できることがうかがえる。

REPRINTS®のボランティアは、これまでに絵本の読み聞かせ活動で多種多様なテーマの絵本を用いてきた。SOS の出し方に関する教育に絵本の読み聞かせを導入することを踏まえ、2017年度にワーキンググループを発足させた。ワーキンググループでは、「命・つながり」と「SOS の出し方」をメインテーマとする適切な絵本を選書し、リスト化している。

2018年に、府中市福祉保健部健康推進課(以下、「市」)は、以上のREPRINTS®の活動に着目し、学校、高齢者ボランティア(以下、「ボランティア」)と連携したSOS の出し方に関する教育授業(以下、「特別授業」)を実施した。

本研究は、市から得たデータの二次分析をもとに、SOS の出し方に関する授業が中学生の意識に与える影響を検討する。

2. 方法

対象 東京都府中市のA中学校2年生全員を対象とした。基本的な枠組みは「プロトタイプとしての東京都足立区モデル: 1回完結式外部講師活用型」を参考にしている。特別授業は「総合的な学習の時間」の中で

行われた。事前調査(2018年9月)では174名(男子88名、女子86名)、事後調査(2018年12月)では167名(男子85名、女子82名)が回答した。事前事後の変化の検討をするため、両調査に回答した163名(男子82名、女子81名)を分析対象とした。

手続き 市が主体となり実施したプログラムの結果を二次利用した。特別授業は学校教員、市職員(保健師等)、高齢者ボランティアが協働して行い、全体として1回50分のプログラムとして構成された。

学校教員は事前に生徒・保護者への周知を行い、特別授業の約2週間前に事前調査のアンケート用紙の配布と回収を同日に行った。特別授業当日、学校教員は市職員がスムーズに授業を開始できるように、特別授業の教室の設営と机間巡視を行った。市職員はストレス、ストレスコーピング、SOS の出し方について生徒に説明を行った後、相談機関についてのリーフレットの配布を行った。引き続き、高齢者ボランティアは特別授業の内容に関連するテーマの絵本の読み聞かせを行った。

(1) プログラム内容(表1)

市職員の担当部分では、東京都教育委員会から配布される「SOS の出し方に関する教育を推進するための指導資料」⁵⁾を利用した。「生まれたときから今まで一生懸命に生きてきた」ということを思い返すことで、自尊心を高めることを意図した内容であった。次に、悲しいときやつらいときは「こころのSOS」であることを伝え、ストレスおよびストレスコーピング、SOS の出し方について説明を行った。SOS の出し方のキーメッセージは「少なくとも3人には声をかけてみる」ことであり、自身のことを理解してくれる人に出会うために積極的な行動を促す内容であった。最後に、市の相談機関のリーフレットを配布し、困ったときには気兼ねなく電話をかけるよう伝えた。

ボランティアの担当部分では、高齢者ボランティアによるワーキンググループが作成した「SOS 絵本リスト」の中から、当日に読む絵本の候補として3冊挙げた。その後、市と学校との協議により、3冊の中から「たいせつな きみ」を選んだ。この絵本は、世間からからかわれて自信を失くしている主人公が信頼できる他者を探し出す物語である。信頼できる他者に会

うまで多少の道のりがあること、周囲に何と言われても自身を思ってくれる人の存在の大切さを伝えることが、この絵本のメッセージであった。絵本のメッセージと市職員が担当した講義のメッセージは同じであり、絵本はボランティアへの親しみを持たせるのみならず、特別授業全体のまとめとしての役割も担っていた。

(2) 質問項目

悩みの有無と内容、相談したい相手の有無とその相手、相談をした経験、相談を受けた経験とその際の対応、相談先の探し方、周囲の親しい大人（信頼できる大人、気楽に相談できる大人、自分のことを大切にしてくれる大人、挨拶をしてくれる大人）の、それぞれについて有無を尋ね、「あり」と回答した場合、その人数を尋ねた。悩みの有無について「ある」と回答した者には、その内容も尋ねた。

ストレスコーピングの測定には、小学生用ストレスコーピング尺度短縮版^{8,9)}を使用した。本尺度は「だれにどうしたらよいか聞く」、「自分を変えようと努力する」、「友だちと遊ぶ」などの12項目であり、「1=よくした、2=ときどきした、3=たまにした、4=ほとんどしなかった」の4件法で評定を求めた。得点が高い

ほどストレスコーピングを身に付けていることを示すよう、全項目について逆転処理を行った。得点範囲は12点から48点であった。

自尊心の測定として、短縮版児童用コンピテンス尺度^{8,9)}の下位尺度の自己価値を使用した。この自己価値は自尊心とほぼ同義であるとされている⁹⁾。「たいていのことは、人よりうまくできると思う」、「自分の意見は自信を持っていえますか」、「自分にはあまりいいところがないと思いますか」などの10項目であり、「1=はい、2=どちらかといえばはい、3=どちらかといえばいいえ、4=いいえ」の4件法で評定を求めた。得点が高いほど自己価値が高いことを示すよう、一部の項目は逆転処理を行った。得点範囲は10点から40点であった。

(3) 集計方法・分析計画

事前調査と事後調査の両方に回答した163名（男子82名、女子81名）を分析対象とした。なお、無回答を除いた実際の有効度数は集計項目・分析項目毎に異なる。

「悩みの有無」や「相談したい人の有無」などのような質問においては、「ある」と回答した者はその内訳

表1 実施された指導例

学習活動	分担
【導入3分】 1. 挨拶 自己紹介 今日来た目的・流れ 高齢者ボランティアの紹介	保健師等
【前半25分】 2. 東京都より配布されたパワーポイントを使用 3. パワーポイントを進める ・ストレスとはこころのSOS （発問）自分がつらい気持ちになった時、それを軽くするために、どのようなことをしていますか？ ・一番のおすすめは身近な信頼できる人に話すこと （主発問）みなさんは、こころが苦しい時、話してみようと思う人はいますか？ ★こころの苦しさを相談できる場所があります ・友達がつらそうにしていたら ・自分、相手、一人ひとりを大切に ★世の中には信頼できる大人もいて、苦しい時、大変な時には助けを求めてほしい	保健師等
【後半20分】 4. 高齢者ボランティアによる絵本の読み聞かせ 「たいせつな きみ」（作：マックス・ルケード）	高齢者ボランティア
【まとめ2分】 5. 相談先に関する情報提供 ・リーフレット配布	保健師等

について、該当するもの全てに回答するように求めた。内訳の割合は、「ある」と回答した者を分母、内訳の該当者数を分子として算出した。その他の項目についても同様に算出した。

悩みの有無と周囲の親しい大人の有無については、事前調査と事後調査でのそれぞれの割合の比較を行うために McNemer 検定を行った。悩みの有無の質問項目は「ある」、「前にあった」、「特にない」の3件法であるが、McNemer 検定を行う際は、「前にあった」と「特にない」を統合し「今はない」とした。つまり、介入前後で「ある」と「今はない」の割合に統計学的有意差があるかを検証した。介入前後における、周囲の親しい大人の人数、ストレスコーピング、自己価値

については、Wilcoxon の符号順位和検定にて検討した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、東京都健康長寿医療センター研究所の倫理審査の承認を得ている（30 健イ事第 2500 号）。

3. 結果

事前調査と事後調査の集計結果は表 2 から表 8 に示した。事前調査での悩みの有無とその内訳については、「ある」24.5%、「前にあった」9.2%、「特にない」58.9%であった。事後調査では、「ある」36.8%、「前にあった」11.0%、「特にない」50.3%であった。悩みの内容については、事前調査と事後調査ともに、「勉強（事前調査 65.0%、事後調査 76.7%）」が最も高かった（表 2）。

表 2 生徒の悩みの内容と割合（複数回答可）

	事前調査 (n=163)		事後調査 (n=163)	
	該当者数	該当%	該当者数	該当%
ある	40	24.5%	60	36.8%
勉強	26	65.0%	46	76.7%
進路	14	35.0%	33	55.0%
友だち関係	8	20.0%	16	26.7%
恋愛	4	10.0%	11	18.3%
いじめ	0	0.0%	1	1.7%
性	0	0.0%	1	1.7%
親・家族のこと	6	15.0%	9	15.0%
近所の人や近所の様子	0	0.0%	0	0.0%
その他	7	17.5%	13	21.7%
前にあった	15	9.2%	18	11.0%
特にない	96	58.9%	82	50.3%
未記入	12	7.4%	3	1.8%

※悩みの有無について回答がない場合でも、その内容について回答があった者は「ある」として集計に含めた。

表 3 相談したい相手（複数回答可）

	事前調査 (n=163)		事後調査 (n=163)	
	該当者数	該当%	該当者数	該当%
相談したい人がいる	141	86.5%	149	91.4%
親	94	66.7%	109	73.2%
親以外の家族	17	12.1%	23	15.4%
友だち	113	80.1%	117	78.5%
担任や担任以外の先生	25	17.7%	37	24.8%
保健室の先生	1	0.7%	1	0.7%
スクールカウンセラー	5	3.5%	6	4.0%
スクールソーシャルワーカー	0	0.0%	0	0.0%
地域・近所の人	0	0.0%	1	0.7%
その他	3	2.1%	6	4.0%
相談したい人はいない	22	13.5%	14	8.6%
未記入	0	0.0%	0	0.0%

事前調査での相談したい人の有無は、「相談したい人がいる」86.5%、「相談したい人はいない」13.5%であった。事後調査では、「相談したい人がいる」91.4%、「相談したい人はいない」8.6%であった。「相談したい人がいる」と回答した者の中で、最も多かった相談したい相手は、事前調査・事後調査ともに「友だち」

(事前調査 80.1%、事後調査 78.5%) であり、その次に「親」(事前調査 66.7%、事後調査 73.2%) であった(表 3)。

相談した経験のある相手は、事前調査では「友だち」73.8%、次に「親」69.7%であった。一方、事後調査では、「親」75.8%、次に「友だち」75.0%と、わずかに

表 4 相談した経験のある相手 (複数回答可)

	事前調査 (n=163)		事後調査 (n=163)	
	該当者数	該当%	該当者数	該当%
相談した経験あり	122	74.8%	132	81.0%
親	85	69.7%	100	75.8%
親以外の家族	17	13.9%	22	16.7%
友だち	90	73.8%	99	75.0%
担任や担任以外の先生	20	16.4%	35	26.5%
保健室の先生	2	1.6%	3	2.3%
スクールカウンセラー	4	3.3%	4	3.0%
スクールソーシャルワーカー	0	0.0%	0	0.0%
地域・近所の人	0	0.0%	1	0.8%
その他	3	2.5%	3	2.3%
相談した経験なし	41	25.2%	31	19.0%
未記入	0	0.0%	0	0.0%

表 5 相談先の探し方 (複数回答可)

	事前調査 (n=163)		事後調査 (n=163)	
	該当者数	該当%	該当者数	該当%
友だちに聞く	74	45.4%	59	36.2%
親・家族に聞く	59	36.2%	59	36.2%
先生に聞く	15	9.2%	25	15.3%
地域・近所の人に聞く	0	0.0%	1	0.6%
インターネットで探す	40	24.5%	46	28.2%
インターネット以外の方法で探す	2	1.2%	0	0.0%
相談するのをあきらめる	36	22.1%	45	27.6%
その他	1	0.6%	7	4.3%
未記入	0	0.0%	0	0.0%

表 6 相談された際の対応 (複数回答可)

	事前調査 (n=163)		事後調査 (n=163)	
	該当者数	該当%	該当者数	該当%
相談された経験あり	95	58.6%	102	62.6%
話をよく聞いた	73	76.8%	88	86.3%
アドバイスをした	61	64.2%	80	78.4%
相談に来た人をはげました	46	48.4%	49	48.0%
いっしょに解決方法を考えた	59	62.1%	70	68.6%
家族に相談した	8	8.4%	14	13.7%
先生に相談した	3	3.2%	9	8.8%
地域・近所の人に相談した	0	0.0%	0	0.0%
その他	1	1.1%	0	0.0%
どちらともいえない	24	14.8%	20	12.3%
相談された経験なし	43	26.5%	41	25.2%
未記入	1	0.6%	0	0.0%

異なっていた (表 4)。

相談先の探し方について、最も多かったのは「友だちに聞く (事前調査 45.4%、事後調査 36.2%)」、次いで「親・家族に聞く (事前調査 36.2%、事後調査 36.2%)」、
「インターネットで探す (事前調査 24.5%、事後調査 28.2%)」であった (表 5)。他方、「相談するのをあきらめる (事前調査 22.1%、事後調査 27.6%)」と回答した者が 20%を越えていた。

相談された経験とその際の対応については、事前調査・事後調査ともに約 60%が相談された経験があった (表 6)。最も多かった対応は「話をよく聞いた (事前調査 76.8%、事後調査 86.3%)」であった。「アドバイ

スをした (事前調査 64.2%、事後調査 78.4%)」、「相談に来た人をはげました (事前調査 48.4%、事後調査 48.0%)」、「いっしょに解決方法を考えた (事前調査 62.1%、事後調査 68.6%)」などの対応も 4 割を越えており、相談された際の対応の種類は多く用いられていることが示された。

事前調査と事後調査における、悩みの有無、相談したい相手の有無、周囲の親しい大人の有無の割合について McNemer 検定を行った。その結果、悩みの有無については、事前調査より事後調査での「ある」の割合が増加した ($p<.05$)。同様の検定を相談したい相手の有無について行ったところ、事前調査より事後調査

表 7 周囲の親しい大人の内容と人数

	事前調査 (n=163)					事後調査 (n=163)				
	M(SD)	Me	Mo	該当者数	該当%	M(SD)	Me	Mo	該当者数	該当%
信頼できる大人	3.69 (5.50)	2.00	0	0人	50 30.7%	4.12 (6.63)	2.00	0	45 27.6%	
				1-2人	34 20.9%				33 20.3%	
				3-4人	25 15.3%				29 17.8%	
				5-6人	17 10.4%				19 11.7%	
				7-8人	11 6.8%				10 6.1%	
				9人以上	18 11.0%				17 10.4%	
				未記入_無効回答	8 4.9%				10 6.1%	
気楽に相談できる大人	2.07 (3.11)	1.00	0	0人	70 42.9%	2.18 (5.31)	1.00	0	75 46.0%	
				1-2人	42 25.8%				40 24.5%	
				3-4人	20 12.3%				23 14.1%	
				5-6人	11 6.8%				9 5.5%	
				7-8人	5 3.1%				4 2.5%	
				9人以上	8 4.9%				6 3.7%	
				未記入_無効回答	7 4.3%				6 3.7%	
自分のことを大切にしてくれる大人	3.50 (4.95)	2.00	0	0人	65 39.9%	3.63 (6.26)	2.00	0	54 33.1%	
				1-2人	22 13.5%				26 16.0%	
				3-4人	23 14.1%				22 13.5%	
				5-6人	17 10.4%				18 11.0%	
				7-8人	9 5.5%				7 4.3%	
				9人以上	19 11.7%				15 9.2%	
				未記入_無効回答	8 4.9%				21 12.9%	
挨拶をしてくれる大人	6.94 (13.81)	3.00	0	0人	58 35.6%	4.58 (6.87)	2.00	0	34 20.9%	
				1-2人	12 7.4%				30 18.4%	
				3-4人	15 9.2%				28 17.2%	
				5-6人	13 8.0%				19 11.7%	
				7-8人	8 4.9%				10 6.1%	
				9人以上	35 21.5%				20 12.3%	
				未記入_無効回答	22 13.5%				22 13.5%	

M; Mean, SD; Standard deviation, Me; Median, Mo; Mode

※周囲の親しい大人の内容において、該当しない場合は「0人」、該当するが、人数が不明であった場合は「未記入_無効回答」とした。

表 8 ストレスコーピング、自己価値の記述統計量

	事前調査			事後調査		
	M(SD)	Me	IQR	M(SD)	Me	IQR
ストレスコーピング (n=148)	25.3 (5.4)	25.0	8.0	26.3 (5.2)	26.5	7.0
自己価値 (n=146)	23.7 (6.1)	24.0	8.3	23.6 (6.8)	24.0	9.0

M; Mean, SD; Standard deviation, Me; Median, IQR; Interquartile range

後の「相談したい人がいる」の割合が高い傾向がみられた ($p=0.077$)。周囲の親しい大人 (例：信頼できる大人) の有無については、「挨拶をしてくれる大人」の有無のみ有意であり、事前調査より事後調査の「いる」の割合が高かった ($p<0.05$)。

また、事前調査と事後調査における周囲の親しい大人の人数について、Wilcoxon の符号順位和検定を行った (表 7)。その結果、「信頼できる大人」、「気楽に相談できる大人」、「自分のことを大切にしてくれる大人」、「挨拶をしてくれる大人」の全ての人数において有意差はみられなかった (順に、 $Z=1.07, p=0.283$: $Z=0.65, p=0.515$: $Z=0.81, p=0.419$: $Z=1.01, p=0.315$)。

ストレスコーピングにおいては、事前調査より事後調査において有意に得点が高かった ($Z=2.93, p=0.003$)。自己価値については有意な得点の向上はみられなかった ($Z=0.25, p=0.803$) (表 8)。

4. 考察

本研究の目的は、市、学校、高齢者ボランティアの連携による SOS の出し方に関する教育授業が、中学生の意識に与える影響を検討することであった。悩みの有無については、事前調査では 26.5%、事後調査では 37.5% が悩みを有していた。また、事前調査と事後調査で、悩みの有無について変化がみられ、事前調査に比べて事後調査で「悩みが無い」と回答した割合が高かった。この点について 2 つの可能性が考えられる。第 1 に、3 ヶ月間で悩みが増えたことである。結果から、勉強や進路などに関する悩みを有する生徒の割合が大きくなっている。2 年生の終盤になり、進路についての悩みが生じたのかもしれない。第 2 に、悩みを打ち明けることへの抵抗感が少なくなった可能性がある。SOS の出し方に関する教育では、相談することの大切さを伝えることから、本研究の特別授業においても、市担当部分、ボランティア担当部分ともに、相談することの大切さを伝えている。相談したいと思う相手の人数の増加、すなわち、相談意欲の向上傾向がみられたことから、教育効果として悩みを打ち明けることへの抵抗感が少なくなったと推察される。

また、ストレスコーピングにおいても得点の向上がみられた。授業内で具体的なストレスコーピングの方

法を伝えたことが反映されたと考えられる。ストレスコーピング得点は知識の獲得を反映した指標であると考えられるため、授業の効果がみられやすく、3 ヶ月という持続効果が得られたと推測される。

他方、「周囲の親しい大人」の有無および人数、自己価値では増加・向上がみられなかった。これらに共通することは、経験が重要であるということである。「周囲の親しい大人」については、たとえば「信頼できる大人」は実際に相談に乗ってもらった経験をしてから、その存在の大きさを感じるものである。自己価値についても、自身が大切にされているという意識が芽生えるためには、そのような経験が重要となる。3 ヶ月間という短期間ではこれらの意識に影響がみられなかったものの、長期間にわたる追跡調査であれば、変化を把握できる可能性がある。他方、「挨拶をしてくれる大人」については増加がみられた。実際に人数が増えたという可能性の他、日常の中でそのような大人がいることに気が付いたという意識の表れである可能性もある。

本研究から、知識の獲得とその実施意欲に関連する指標において、高齢者ボランティアとの共同による SOS の出し方に関する教育授業の教育効果がみられた。本研究の事後調査は特別授業実施の 3 ヶ月後に行われた。授業直後の調査よりも、調査の期待に沿うような意識が抑えられていると考えられる。すなわち、SOS の出し方に関する教育効果の維持が示唆された。

今後の課題として、行動レベルでの指標についても検討が必要である。授業後 3 ヶ月間という期間は悩みの経験が生じるには短い。本研究の教育効果を見据えるためには、長期的な検討が必要である。授業内容についても、「SOS の出し方」についての内容は豊富であったが、自己価値・自尊感情の向上に関連する内容は配分として少なかった。この点は、共感が高まりやすい絵本の読み聞かせの効果が期待される。授業で用いる絵本の更なる選定により、「シニア読み聞かせボランティア協働型プログラム (1 回完結式)」がより望ましいものとなる。

本研究の限界として、待機群の設定がなかったことがあげられる。更に高いエビデンスを得るためには交互法の無作為化比較試験での検討が求められる。また、

高齢者ボランティアの絵本読み聞かせを含むプログラムと、その他のコンテンツを含むプログラムを比較し、プログラムのバリエーションの増加と精緻化を行うことで、SOS の出し方に関する教育の柔軟性が高まることが期待される。

また本研究では、ストレスコーピングと自尊心の測定に、小学生を対象とした他の同様のプログラムとの比較可能性等を考慮して、小学生、児童用の尺度をそれぞれ用いた。一般的には、研究対象者と同じ年齢群において検証された尺度を用いることが望ましいが、本研究においては同尺度の信頼性等は確認されており、結果に大きな影響はないと考えられる。

謝辞 本稿は、プログラム実施機関の府中市福祉保健部健康推進課の調査データを二次利用いたしました。職員の皆様には多大なご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

付記 開示すべき COI 状態はない。

（ 受付 2019.8.7
 受理 2019.11.21 ）

引用文献

- 1) 文部科学省. 自殺対策基本法.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/063_6/shiryo/attach/1369741.htm (2019年8月1日閲覧)
- 2) 厚生労働省. 自殺総合対策大綱.
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/huku-shi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/taikou_h290725.html
(2019年8月1日閲覧)
- 3) 鈴木宏幸、大場宏美、安永正史、藤原佳典. 高齢者ボランティアとの交流授業が高学年児童のコミュニケーションスキルに及ぼす影響. 世代間交流学会誌 2012 ; 5 (1) : 21-28.
- 4) 金子善博、井門正美、馬場優子、本橋豊. 児童生徒の SOS の出し方に関する教育: 全国展開に向けての 3 つの実践モデル. 自殺総合政策研究 2018 ; 1 (1) : 1-47.
- 5) 東京都教育委員会. 「SOS の出し方に関する教育」を推進するための指導資料について.
http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/school/content/sos_sing.html (閲覧日 2019年8月2日)
- 6) 外山美紀. 心理測定尺度集IV 子どもの発達を支える<対人関係・適応> 2007 ; 22-27 サイエンス社 堀洋道 (監修) 櫻井茂男・松井豊 (編)
- 7) 大竹恵子、島井哲志、曾我祥子. 小学生のストレスコーピング尺度短縮版の作成. 神戸女学院大学ヒューマンサイエンス 2001 ; 4 : 1-5.
- 8) 櫻井茂男. 小学校高学年性における自己意識の検討. 実験社会心理学心理学研究 1992 ; 32(1) : 85-94
- 9) 櫻井茂男. 心理測定尺度集IV 子どもの発達を支える<対人関係・適応> 2007 ; 22-27 サイエンス社 堀洋道 (監修) 櫻井茂男・松井豊 (編)